

日本活断層学会 2022 年度秋季学術大会開催報告

日本活断層学会 2022 年度秋季学術大会実行委員会

日本活断層学会 2022 年度秋季学術大会を、山口大学吉田キャンパス大学会館にて開催した（主催：日本活断層学会主催、後援：山口大学教育学部・産業技術総合研究所地質調査総合センター）。11 月 26 日（土）午後と 27 日（日）午前の一般研究発表には、75 名（会員 49 名、非会員 13 名、学生 13 名）に参加いただいた。一般研究発表後には、2022 年度日本活断層学会表彰式を執り行った。27 日（日）午後には、一般の方を含む約 80 名の方に参加いただき、一般公開シンポジウム「活断層と私たちの暮らし—活断層がもたらすもの—」を開催した。また、大会後の 28 日（月）には、23 名（会員 14 名、非会員 4 名、学生 5 名）の有志で巡検「断層で巡る石州街道」を実施した。



26 日（土）午後、鈴木康弘会長による開会挨拶ののち、一般研究発表へと移り 7 件の口頭発表、19 件のポスター発表が行われた。口頭発表では、若手 3 名による研究発表を皮切りに、2016 年熊本地震被災地域を対象とした様々なアプローチによる研究成果が紹介された。ポスター発表では、アウトリーチから各地域の詳細な調査研究の成果、新たな調査手法の紹介などがあり、ポスターの前で活発な議論が行われた。

27 日（日）午前には、前日に引き続いて一般研究発表として 6 件の口頭発表が行われた。前半では中・四国地方の活断層調査、後半は海外の活断層調査について報告され、最後の一般研究発表は、活断層研究の社会還元を考えるものとなった。

27 日（日）の一般研究発表終了後には、論文賞と若手優秀講演賞の表彰式が開かれ、鈴木康弘会長による表彰が行われた。その後、堤 浩之副会長の挨拶をもって秋季学術大会を閉会した。

2022 年度の論文賞ならびに若手優秀講演賞受賞者は、次の通りである。

○論文賞（敬称略）

宋倉正展・越後智雄・行谷佑一「能登半島北部沿岸の低位段丘および離水生物遺骸群集の高度分布からみた海域活断層の活動性」（活断層研究 53 号掲載）

○若手優秀講演賞（敬称略）

舘野宏彰「ボーリングデータから示唆された世田谷区東部の活構造」

西山成哲「活断層地形が不明瞭な地域における小断層の応力逆解析：1984 年長野県西部地震の震源周辺地域における例」（共著者：中嶋 徹・後藤 翠・箱岩寛晶・末岡 茂・島田耕史・丹羽正和）

山中 蛍「糸魚川・静岡構造線活断層系南部区間の北半部の活断層分布と運動様式」

27 日（日）午後には、シンポジウム「活断層と私たちの暮らし—活断層がもたらすもの—」が一般公開で行われた。鈴木康弘会長より開催の挨拶の後、オーガナイザー・熊原康博氏による趣旨説明がなされた。その後、同・石黒聡士氏の司会のもと、「活断層を伝える」「活断層とともに暮らす」「文化をもたらす活断層」という視点に立った以下 6 件の講演が行われた（敬称略）。講演の後には、細矢卓志氏をファシリテーターに、6 名の講演者と来場者によるパネルディスカッションが行われ、宇根 寛副会長による挨拶をもってシンポジウムを閉じた。

研川英征「国土地理院の「1:25,000 活断層図」整備について」

山口 勝「日本活断層学会の普及教育事業—活断層を社会に「気づき・学び・生かす」—」

後藤秀昭「活断層の地形を活かした人々の歴史的な営み」

坂本文隆「震災で気づいた益城町の魅力—熊本地震から 6 年—」

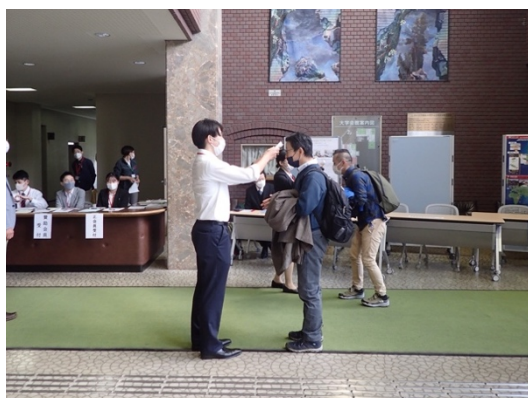
副田宜男「活断層と温泉資源・地熱資源—温泉と地熱が育む文化と産業—」

柴田伊廣「活断層と文化財について—天然記念物の保存活用の例—」

28日（月）には、巡検「断層で巡る石州街道」が楮原京子・熊原康博・副田宜男氏の案内で行われた。巡検については、文末に掲載の参加者からの報告をもって開催報告とする。

本大会は、事前参加登録をはじめ、来場者にはガイドラインに則った感染防止対策にご協力いただいた。表彰式後の堤浩之副会長挨拶を一時忘れてしまうハプニングがあったものの、滞りなく秋季学術大会を終了することができた。この成功の陰には、（公財）山口コンベンション協会、シンポジウム講演者のみなさま、学会事務局および関係委員会のみなさま、アルバイトのみなさまのご支援・ご尽力があった。ここに記して深く感謝申し上げます。

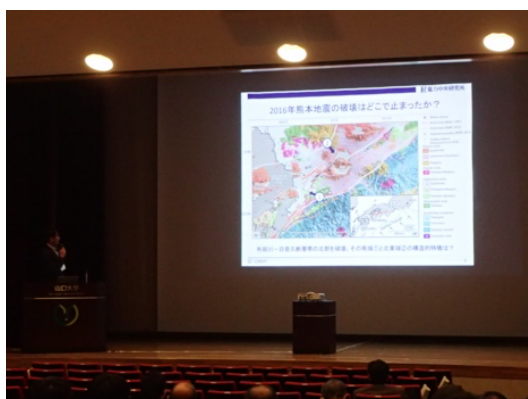
写真で振り返る 2022 年度活断層学会秋季学術大会



1) 大会受付・検温



2) 開会挨拶（鈴木康弘会長）



3) 一般研究発表・口頭発表



4) 一般研究発表・聴講側



5) ポスター会場



6) 一般研究発表・ポスター発表



7) 表彰式・論文賞の表彰



8) 若手優秀講演賞受賞者



9) 閉会挨拶（堤 浩之副会長）



10) 企業展示



11) シンポジウム・趣旨説明



12) シンポ・パネルディスカッション



13) シンポ閉会挨拶（宇根 寛副会長）



14) シンポ講演者による情報提供

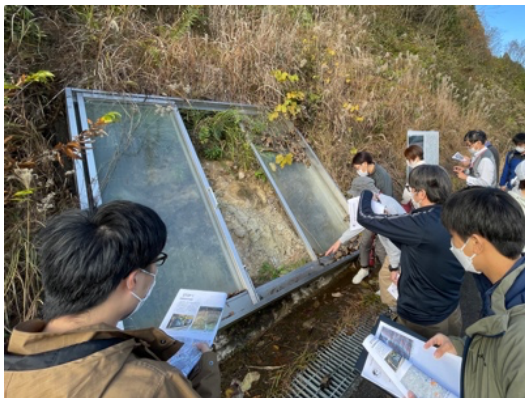
巡検参加報告

広島大学大学院生 岩佐佳哉

2022 年度秋季学術大会最終日の 11 月 28 日に、楮原京子（山口大学）、熊原康博（広島大学）、副田宜男（西日本技術開発（株））の各氏の案内で、「断層で巡る石州街道」と題した巡検が行われた。山口大学を出発し、午前中は石州街道に沿って北上しながら観察地点を巡った。最初に、県道工事に伴って出現した活断層露頭が保存されている山口市阿東篠目を訪れた。ガラス戸を開けて露頭を観察するとともに、並走する活断層の変位様式との関係や周辺に分布する段丘の形成年代に関する議論が行われた。その後、道の駅「長門峡」そばの、篠目川と阿武川が合流して長門峡へと注ぐ地点の河床に露出した断層を見学した。幅数 cm の断層粘土を観察し、ほかの地域との断層粘土や破碎帯の発達の違いについて議論が行われるとともに、長門峡やその上流の徳佐盆地の形成過程についても意見が交わされた。徳佐盆地の北東縁に位置する道の駅「願成就温泉」で野坂山を見上げながら昼食を取り、午後は一気に南下して新山口駅周辺の観察地点を巡った。山口市小郡下郷では小河川に出現した活断層露頭を観察した。最後に、山口市嘉川で低位段丘面を切る比高約 5 m の低断層崖を観察した。低断層崖の上には寺院が立地し、新幹線が横切る地点ともなっており、明瞭な断層変位地形であることを認識するとともに、シンポジウムのテーマについて再び考える機会にもなった。

巡検には 23 名が参加し、11 月末とは思えない陽気のなか見学をすることができた。用意された豊富な資料と現地における説明や議論から、山口市周辺の活断層や地形の特徴について理解を深めることができた。また、断層に沿って形成された谷や盆地に近世の石州街道が通り、人々の生活が営まれている様子を実感できた。

巡検の企画・運営にあたられた楮原様をはじめとする案内人の方にお礼申し上げます。



阿東篠目での活断層露頭の観察



河床に露出した断層粘土の観察



低位段丘面を切る低断層崖の観察



野坂山をバックに参加者の集合写真